

2012年大統領選挙の過程と投票行動の分析

——消極的消去法と二つの惰性——

阿 南 東 也

- I はじめに
 - II 候補者選抜過程
 - 1 予備選挙
 - 2 党大会と選挙運動
 - III 投票行動結果分析
 - 1 人口統計下部集団別投票行動に見る全体像
 - 2 短期的要因と長期的要因
 - IV おわりに—位置付けと展望
- 注
英文要約

I はじめに

2012年アメリカ大統領選挙は、第44代オバマ（Barack Hussein Obama）が再選を果たす結果となった。

この表面的な結果のみを見る限りは、現職の大統領が再選された、確率上多くある例の一つになったに過ぎないかもしれないが、その内容を吟味すると様々な例外的な要素をはらんでいたこともわかる。最も顕著なものは、オバマは二期連続で再選された大統領としては、二期目の選挙で一期目の選挙より一般得票、選挙人得票を落としたという現段階で唯一の記録¹⁾を作ったことである。

現職の大統領が再選を目指す選挙では、過程ではその現職大統領を中心に推移し、選挙結果はその現職大統領の信任投票の性格を帯びてくる。有権者の投票行動原理は過去4年間をどう評価するかという回顧投票（retrospective voting）²⁾が中心となり、現職が再選された場合はその中間業績が信任されたのであり、対立候補が勝った場合は、事実上は対立候補の

勝利ではなく現職が不信任を突きつけられたのである。2012年の結果としてはオバマが信任された形ではあるが、既に述べたようにその4年前と比較すると票を落としており、必然的に対立候補であった共和党指名候補ロムニー（Mitt Romney）との選挙戦は拮抗したものとなり、勝敗予測も最終段階まで予断を許さず、結果も僅差であった。

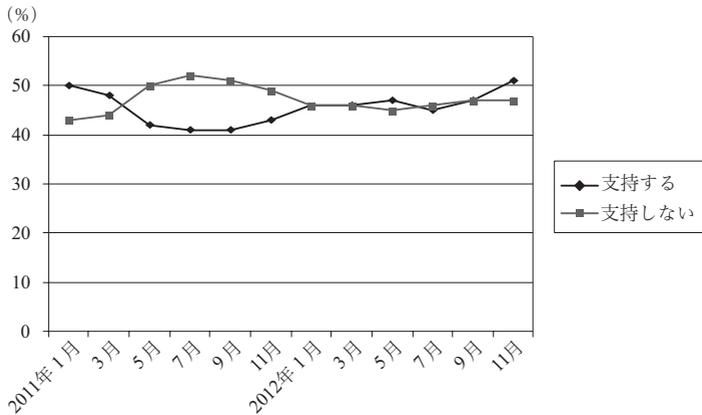
この結果を分析するには、様々なレベルからの視点が必要になってくるであろう。近視眼的、すなわち直接的な視点においては、オバマの業績への評価が、再選には十分足る水準であったにせよ、それほど高い水準でもなかったことからそのような結果になったことは容易に想像できる。またより巨視的な視点においては、2000年代以降のアメリカの有権者は「赤いアメリカ」すなわち共和党の基盤となる部分と、「青いアメリカ」すなわち民主党の基盤となる部分とにほぼ均等に二分されていて、全国選挙の結果、二大政党の勢力が拮抗し、なおかつそれぞれの党派性が強まって対立が顕著になっていた³⁾。2012年の結果はその環境の延長線上にあったと捉えられるかもしれない。そうであるとするならば、そのアメリカ政治における巨視的状况は長期的なものであり、議論が下火になって久しい「決定的選挙論（critical elections）」に基づいた「政党再編成論（realignment）」において主張されたような⁴⁾、政治史における一つの時代を作るに匹敵するものなのであるか。また、2000年代はそのような状況下でブッシュ（George Walker Bush）が二回連続して当選し、二大政党が拮抗した状態においても共和党がアメリカ国内での長期的な人口流動、また大統領選挙において一般投票による票が少なくても効率よく大統領選挙人数が確保できるといった構造上のアドヴァンテージを持っている状況であったのだが、それではここにきて民主党のオバマが連続で当選した事実はいかに解釈されるであろうか。

II 候補者選抜過程

1 予備選挙

オバマは2010年の中間選挙で反対党である共和党に上下両院において逆転で多数党の位置を奪還される大敗を喫した後も⁵⁾、失業率の改善が見られないなど経済の状態を表す指標の好転が見られず、国民の中での生活水準向上感の欠如は大統領業績支持率にも現れ、2011年の大半の時期を

2012年大統領選挙の過程と投票行動の分析



グラフ1 中間選挙後のオバマの業績支持率

出所：Gallup社の調査を基に筆者作成

「支持しない」が「支持する」を上回った状況で推移していた。同年11月にアメリカとしてのイラク戦争への関与の完全終結を宣言し、「支持する」と「支持しない」がほぼ拮抗するまでに至ったが、「支持する」が50%に届かず45%前後を推移していた状況で2012年選挙の予備選挙の時期に入った。

オバマは2011年5月という早い段階において次年の選挙において再立候補する旨を表明していた。オバマの業績を「支持する」と答えていた有権者の90%前後が常に民主党員であり、既述の2000年代以来のアメリカの「赤」と「青」の分裂をそのまま引き摺った形になっていた。全体的な業績支持率が低い水準であるにせよ大統領輩出側である民主党にとって現職大統領は唯一無二の存在であり、1976年選挙で現職のフォード（Gerald Ford）に敢えて挑戦したレーガン（Ronald Reagan）のような党内対抗者も存在せず、民主党側の候補者選抜過程は無風に終始した。それにもかかわらず、既に述べたようにオバマは結果的に二期目の選挙の当選者としては低投票獲得の記録を作ることになるのである。

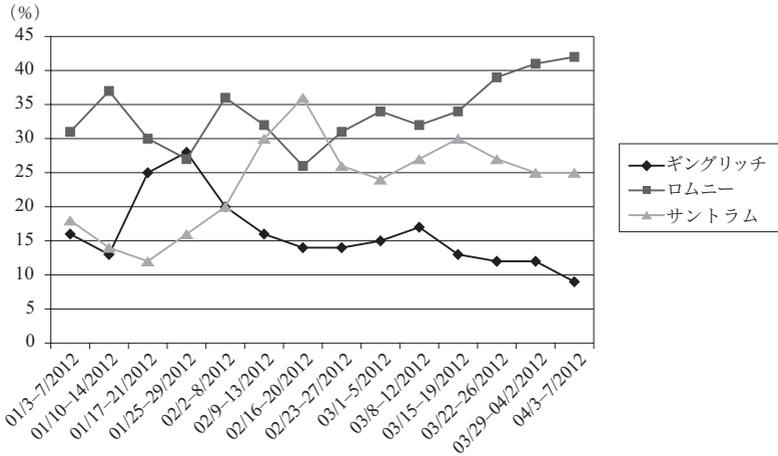
共和党側はゼロからのスタートであり、大統領という象徴の存在の欠如から、元来より内包している党内での様々な分裂が顕在化しその体現として様々な潜在候補者が登場し、また同時にインターネット時代の情報の双方向化、加速化によって世論の変動が小刻みになり、候補者への支持が短

期で乱高下するようになった傾向を受け、予備選挙開始以前で様々な潜在候補が登場してはすぐに消えて行った。それらには、2008年大統領選挙における副大統領指名候補であり、10年中間選挙では、地方運動として勢力を持ったものの全国化されなかった所謂「茶会運動 (Tea Party Movement)」の最低限の顔の役目を果たした、元アラスカ州知事で保守派のペイリン (Sarah Palin)⁶⁾、やはり保守的な茶会運動から次の顔となることを期待された下院議員バックマン (Michelle Buchman)、潤沢な個人的運動資金と知名度を持ち11年夏の時点では本命視さえされていた中道派の元テキサス州知事ペリー (Rick Perry) などがいた。これらは支持動向の流動性ととも選挙資金の目処が立たずに予備選挙以前に脱落していった。

共和党で予備選挙まで残って指名を争ったのは、ロムニー、GINGRICH (Newt Gingrich)、サントラム (Rick Santorum) の三者であった。

GINGRICHは、1994年中間選挙における共和党の逆転、議会内多数派復帰の象徴的存在であり、95年から下院議長として共和党議会を統率し、擬似党綱領である「アメリカとの契約」を盾にクリントン (Bill Clinton) 大統領に対して強硬な対抗姿勢を打ち出し、大統領と議会の対立を深刻化させ96会計年度国家予算歳出法案通過を遅らせ政府業務の部分的停止の事態にまで追い込んだ⁷⁾。95年のアメリカ政治の世界ではクリントンより存在感があり、『タイム』誌の「一年の顔」に選出された。アメリカの政治家で大統領以外で選出されたのは他にキッシンジャー (Henry Kissinger) の例があるのみである。しかしながら、政府業務停止の異常事態に対して世論は議会側の行き過ぎが原因であるとの判断を示し、景気の回復傾向とも重なりクリントンへの業績支持率を向上させ、96年選挙での再選を許し議会共和党が議席数を減らす結果となった後は大統領への攻撃姿勢を一旦弱めた⁸⁾。98年にクリントンに不倫偽証疑惑が浮上すると再び攻撃姿勢を強めたが、これも引き続き好況感を享受していた世論に支持されず、98年中間選挙で共和党は多数党の立場は守ったものの議席数を更に減らす結果になったことの責任を取る形で、議員そのものから辞職した⁹⁾。このような経歴からこの三人の中で元来最も知名度があったのはGINGRICHであった。しかしながら同時に、1999年の引退以来12年の間、政治の表舞台に立つことはなかったのであり、時流から外れていた観も否めなかった。GINGRICHは主に共和党内の財政保守派から支持を集めていた¹⁰⁾。

2012年大統領選挙の過程と投票行動の分析



グラフ 2 予備選挙期間の共和党指名候補者への支持率

出所：Gallup 社の調査を基に筆者作成

サントラムは2008年までペンシルヴァニア州選出で上院議員を務め、茶会運動から支持されていた候補が次々と脱落していった後、共和党内の社会文化保守派の支持を固めていった¹¹⁾。

最終的に指名候補となったロムニーであるが、1947年生まれで、仮に大統領に当選していたとしたら世代的にクリントン、ブッシュに戻ってしまっていたことになる。ミシガン州デトロイト生まれで、父親はミシガン州知事であった。モルモン教徒であり、ユタ州ブリガムヤング大を卒業した後、ハーバード法科大学院、経営大学院を修了した。投資会社経営により財を成し、2002年ソルトレイクシティ冬季オリンピックの実行委員長を務め、政治上の経歴としては03年から07年までマサチューセッツ州知事を務めていた。

大統領選挙においては「青い州」の代表格とされるほど民主党が強い同州において共和党のロムニーが知事を務めるに当たり、国民皆保険制度改革に対して好意的な態度を示すなど中道穏健的な政策、立場で知られていた¹²⁾。そのため共和党内でも中道派からの支持を集めており¹³⁾、また前回の2008年にも予備選挙に出馬しスーパー・チューズデイの結果を受けて撤退するまでその年の指名候補となったマケイン(John McCain, 上院議員、アリゾナ州選出)に次いで代議員獲得数で第2位と健闘していたため¹⁴⁾全

国内的な知名度も十分であった。

このように共和党で指名候補争いを演じた三人によって党内の分裂が象徴されることになった。そして、サントラムが大統領選挙戦の嚆矢となる、2012年の場合は1月3日に行われたアイオワ州党員集会で勝利し、ロムニーがその次に来る、より規模の大きな序盤の山場である、同月10日に行われたニュー・ハンプシャー州の予備選挙において勝利し、ギングリッチがそれに続く21日に行われたサウス・キャロライナ州の予備選挙で勝利するという、指名候補選抜開始の段階で三つ巴の争いの様相を呈したためその印象は更に増幅されることになった。

グラフ2から明らかのように、党内の支持率の変化においていずれの三者ともある時点で他の二者より上に立ったことがあり、党内の別々の母集団を代表していた三者がともに決め手を欠いていたことがわかるが、大勢が判明する3月6日のスーパー・チューズデイまでには獲得代議員数がロムニーが415人、サントラムが176人、ギングリッチが105人と、圧倒的ではないにせよロムニーが着実に前進していた¹⁵⁾。その結果を受けても二人は撤退を表明せず競合は継続されたが、4月19日にまずギングリッチが撤退しロムニーを支持する立場を表明した。サントラムは指名候補となる可能性がほぼなくなった後も挑戦を続ける姿勢を見せ、ロムニーを支持しない態度を打ち出していたため共和党の本格的な分裂を予見させさえもしたが、最終的には5月7日に撤退、獲得した代議員にロムニーへの支持を呼びかけ、共和党の指名獲得競争は事実上終了した¹⁶⁾。

2 党大会と選挙運動

2012年の指名候補者は民主党はオバマ、共和党はロムニーに絞られたわけであるが、それ以降のこの二人に対する有権者の支持率は、オバマの業績支持率における「支持」と「不支持」の拮抗状況をそのまま反映し、両候補とも46%前後で推移し、優位も僅差で上下する状態で続いた(グラフ3)。

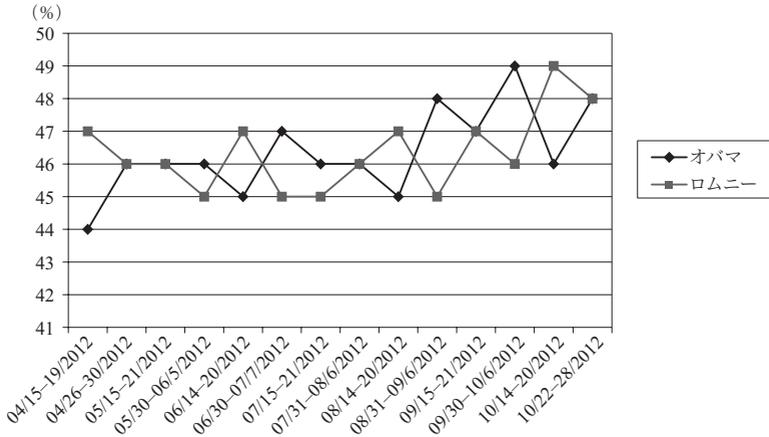
大統領を輩出していない側から先に行われる党大会はまず共和党大会が8月27日から30日までフロリダ州タンパで開催されロムニーを正式に大統領候補として指名した。「揺れる州 (swing state)」の中で最大の人口を有しており2000年以降の大統領選挙のキャスティングヴォートを握っている観さえある同州を重視した開催場所の選択であったといえよう。パ

パフォーマンスでは、俳優のクリント・イーストウッド（Clint Eastwood）が、誰も座っていない椅子にオバマが座っていると想定して語りかけるモノローグがクライマックスとなった。

党大会における最重要事項である副大統領候補の発表も行われ、ライアン（Paul Ryan）下院議員が指名された。1970年生まれで選挙の時点で42歳と若手で、ウィスコンシン州の選出で中西部に拠点を置いており、財政保守派としての行動が目立っていた。ベビーブーム世代の、東北部に拠点を置く元州知事、中道派であったロムニーにとって、代表できない部分を補う典型的なチケットバランシングによる選択であったといえよう。他に取りざたされた候補も、ほぼ同様の条件をそろえていた。しかしながらライアンの選択は世論の上では好意的に受け取られず、大統領選挙戦の推移そのものへの影響は寡少であるとされた¹⁷⁾。それでも「党大会後の急上昇（conventional bounce）」と呼ばれる党大会直後はその党の候補者が支持率を挙げる現象は見られ、8月31日の時点の調査でロムニーが47%、オバマが44%と逆転していた¹⁸⁾。

近年に例にないほど二つの党大会は間を空けずに計画され、民主党大会は9月3日から6日までノース・キャロライナ州シャーロットで行われた。「赤い州」で固まっている観のある南部に浸透しようとする意図による場所の選択であったといえよう。ここで改めてオバマを正大統領、バイデン（Joseph Biden）を副大統領の候補に正式に指名した¹⁹⁾。民主党大会のパフォーマンスでのハイライトは三日目のクリントン元大統領の応援演説であり、引退後、国際的に人道問題に取り組んで評価を回復しているクリントンの面目躍如であった。やはり「党大会後の急上昇」現象で9月6日の時点ではオバマ48%対ロムニー44%と短期間に逆転した²⁰⁾。

両党の党大会終了後、正式な選挙運動段階に入り、両候補が直接対峙するテレビ討論会は10月3日、11日、22日の三回行われた。第一回目は対外政策を、第二回目は国内政策をテーマに、第三回目はタウンホールミーティング形式でそれぞれ行われた。第一回目の討論はロムニーが有利に議論を進めたと評価されオバマとの差を縮めた²¹⁾が、第二回目、第三回目はオバマが有利に議論を進めたと評価され、オバマへの支持率が微妙に上昇した²²⁾。2004年選挙においては、政党帰属意識が再び強まったことにより有権者が早期から一般投票における態度を決めており投票行動決定に影響することはほとんどなかったとされたテレビ討論であったが、08年か



グラフ 3 オバマ対ロムニーの支持率変化

出所：Gallup 社の調査を基に筆者作成

らは無党派が無党派に回帰したような投票行動傾向を示すようになり、重要性がやや増してきたといえる。12年で両候補の支持率が僅差で推移した背景にも無党派の無党派回帰現象があるといえ、テレビ討論の結果で数値が変化する事象はテレビ討論の重要性の上昇を顕しているといえる。

一般投票の直前で結果に直接的な影響を及ぼした事件として、ハリケーン・サンディの東海岸地域直撃があった。その間オバマは選挙運動を中断し防災に専念し、共和党でオバマ批判の急先鋒であり、次の2016年選挙の潜在指名候補者として現段階で最も近い位置にあるとされているクリスティ (Chris Christie) ニュー・ジャージー州知事と協力して災害管理にあたる姿勢は共感を呼んだ。

オバマとロムニーの支持率は48%でほぼ拮抗した状態で一般投票当日を迎えた。

III 投票行動結果分析

1 人口統計下部集団別投票行動に見る全体像

2012年11月6日に行われた一般投票の結果、投票率は有権者の57%であり、近年の大統領選挙の中では高い水準に入るが、前回08年の61%からは下降しており、全体的に関心、盛り上がり欠いていたことがこの数

字からも明らかである。オバマはその中で約6,217万票を獲得し、それは得票率では50%を若干超えた程度であり、大統領選挙人332票を獲得して再選を果たした。対するロムニーは5,880万票、大統領選挙人獲得は206票に留まった。ロムニーの得票率は49%であり、既に見たような、選挙運動期中の両候補への支持の僅差がそのまま結果となった形であり、08年ではマケインの46%に対してオバマは53%と差をつけて当選していたものが大幅に縮めることとなった。また08年は人口の漸増に加えて投票率も高かったためオバマが獲得した6,965万票という一般投票における票数はそれ以前の選挙の勝利者の中でも史上最多であったが、それから大幅に後退する結果となった。

この結果の内容を精査するならば、2012年のオバマは08年に獲得した人口統計分類上の母集団のほぼ全てにおいて支持を失っており、それによって08年はオバマの圧倒的勝利によって曖昧になっていた伝統的な民主党、共和党の投票基盤を復活させたといえる。

性別においては、女性でオバマに投票したのが55%、ロムニーへは44%であり、これは1%程度であるが女性が民主党候補に投票する率は落ちている。男性ではオバマに43%、ロムニーに53%となっており、オバマとマケインで50%ずつを分け合った前回と比較して、男性票は共和党、の図式に戻っている。民主党を軸として、女性が民主党に投票した率のポイント差をプラス、共和党に投票した率をマイナスとした場合、その差は21ポイントとなり、以前から投票行動の特徴の一つである、女性は民主党、男性は共和党といういわゆる「ジェンダー・ギャップ」は2012年において最大となった。そしてそれは男性においてより顕著になったといえる²³⁾。

人種別に見た投票行動では、まずアフリカ系はオバマが92%から得票し、民主党の伝統的基盤を問題なく抑えたように一見できるが、しかしながらそれは前回の99%との比較において下げている数字であり、通常の選挙で民主党候補が獲得する水準程度までに戻った数値であるといえる。その他の非白人エスニック集団においても、ヒスパニックを含んでいないにかかわらず前回の90%台から70%台へと下降している。オバマ政権は移民政策に関して成果を挙げられず、100万人以上のメキシコからの不法移民を追放した政策がヒスパニックに受け入れられなかったことが影響している。白人エスニック集団からの得票は前回の44%から39%に落

表1 人口統計下部集団別投票率

2012年			2008年		
	オバマ	ロムニー		オバマ	マケイン
全体	50%	49%		53%	46%
性別					
男性 (48)	43	53	男性 (48)	50	50
女性 (52)	52	44	女性 (52)	57	43
人種					
白人(含ヒスパニック)			白人(含ヒスパニック)	45	55
非白人 (20)	78	19	非白人	90	10
白人(除ヒスパニック) (78)	39	57	白人(除ヒスパニック)	44	56
非白人(含ヒスパニック) (7)	71	27	非白人(含ヒスパニック)	86	14
アフリカ系 (11)	92	6	アフリカ系 (12)	99	1
年齢					
30歳未満 (16)	57	38	30歳未満 (18)	61	39
30-49歳 (33)	49	48	30-49歳 (33)	53	47
50-64歳 (35)	46	50	50-64歳 (35)	54	46
65歳以上 (16)	42	55	65歳以上 (16)	46	54
教育					
博士以上			博士以上	65	35
大学院卒 (17)	57	39	大学院卒 (17)	67	33
大卒 (28)	46	50	大卒 (28)	55	45
単科大学 (31)	43	55	単科大学 (31)	51	49
高卒以下 (24)	48	47	高卒 (20)	47	53
			高卒以下 (4)	51	49
地域					
東北部 (21)	58	38	東北部 (21)	57	43
中西部 (23)	51	47	中西部 (24)	53	47
南部 (33)	42	52	南部 (32)	50	50
西部 (23)	52	46	西部 (23)	55	45
政党帰属					
共和党員 (33)	3	96	共和党員 (32)	7	93
民主党員 (37)	93	5	民主党員 (39)	93	7
無党派 (30)	45	50	無党派 (29)	51	49
政治上の立場					
保守 (26)	19	78	保守 (22)	23	77
中道 (44)	57	36	中道 (44)	63	37
リベラル (30)	86	10	リベラル (34)	94	6
年収					
9万ドル以上	41	57			
3万6千～9万ドル未満	47	50			
3万6千ドル未満	59	36			

2012年大統領選挙の過程と投票行動の分析

宗教					
プロテスタント (54)	41	56	プロテスタント (54)	47	53
カトリック (27)	52	45	カトリック (27)	53	47
無	67	26			
結婚					
既婚 (60)	42	56	既婚 (66)	44	56
未婚 (40)	62	35	未婚 (34)	65	35
既婚男性 (29)	38	60	既婚男性	42	58
既婚女性 (31)	46	53	既婚女性	47	53
未婚男性 (18)	56	40	未婚男性	63	37
未婚女性 (23)	67	31	未婚女性	66	34
重要問題					
経済 (59)	47	51	経済 (63)	53	44
保険制度改革 (18)	75	24	イラク情勢 (10)	59	39
財政赤字 (15)	32	66	保険制度改革 (9)	73	28
外交政策 (5)	56	33	テロリズム (9)	13	86
			エネルギー政策 (7)	50	46

出所：Gallup と CNN の出口調査を基に筆者作成。[<http://edition.cnn.com/election/2012/results/race/president#exit-polls>]

ち込み、民主党は少数民族の政党、共和党は白人主流派の政党、の傾向が再び強まったといえる²⁴⁾。

年齢別に見たならば、2008年のオバマは初めて投票する年齢層を投票所に多く足を向けさせ、そこから票を得たことで全体的な勝利に繋げていた側面があったが、12年では30歳未満の層が投票した率そのものが落ち、その中でのオバマへの投票率も61%から57%と下降し、登場の時の熱狂がやや後退したといえる。30歳以上50歳未満の社会の中枢を成す層でほぼ拮抗するが、それでも08年6ポイントの差から、12年はオバマに49%、ロムニーに48%と均衡状態に戻っている。注目すべきはそれより上の50歳以上65歳未満の層であり、08年ではオバマがマケインに対し54%対46%で圧勝していたのに対して、12年ではオバマ46%、ロムニー50%と、これも元来の姿に戻った。それ以上の老年層の共和党支持は不変であり、12年では差が更に広がったといえる。

学歴別に見る投票行動では、大学院修了以上の高学歴層は引き続き民主党支持で固まっているが、それでも2008年と比較した場合12年は10ポイント落としている。大卒以上では08年はオバマが55%、マケインが45%であったが、12年はオバマは46%、ロムニーが50%と逆転されており、

ここも従来の形に戻ったといえる。それ以下の逆転は顕著であり、単科大学卒業の層で08年ではほぼ拮抗していながらもオバマは2%勝っていたのを、12年ではオバマは43%、ロムニーは55%と大差で劣勢であった。高卒以下でも1%しかリードを保てておらず、08年の、若年層、初回投票者を惹きつけて当選した勢いは弱まったといえる。

地方別にみると、東北部、中西部、太平洋岸西部における民主党候補の優勢は相変わらずであるが、変化は南部において顕著である。2000年代の選挙ではほぼ「赤い州」の地方として定着した観のあった南部諸州であったが、08年はオバマ50%、マケイン50%と全くの互角の戦いをし、1990年代以降、民主党候補が当選する条件となっていた、南部で勝てなくとも負けない戦いを演じることを忠実に実現した形でオバマは当選していた。しかし12年ではオバマ42%、ロムニー52%と10ポイントの差で後塵を拝しており、赤い州の地方の南部の様相が復活し、「青」と「赤」の色分けが以前の形に戻ったといえる²⁵⁾。

政党帰属意識による投票では、それぞれの党に帰属意識を持っている有権者がその党の候補に投票するのは当然の現象であり、これが2000年代以降の「青」と「赤」の分裂で有権者の中での党派性、政党の凝集性が強まったことにより尚更顕著になった傾向である。それでも、オバマの08年との比較における変化とは、いわゆる無党派の有権者の投票行動において相当部分が説明できるといえる。08年においては、無党派はオバマ51%、マケイン49%の割合で投票していたのに対し、12年ではオバマは45%、ロムニーが50%と下回る結果になっている。有権者の分裂傾向は継続しているにせよ、08年と12年は、無党派が無党派らしい投票行動に回帰してきた現象も同時に観察でき、最終的な結果の変化の鍵を握ったといえよう。同様に有権者の政治的立場、イデオロギー別での投票行動においても、オバマは、自らを「中道」と位置づけている有権者からの得票を2008年の63%から12年は57%へと落としており、また「リベラル」と位置づけている有権者からの得票も94%から86%へと落としている²⁶⁾。

収入別にみるならば、富裕層は共和党、中間以下の層は民主党、の図式がはっきり現れている。

宗教別では、オバマはカトリック信者の投票者からは民主党の候補として引き続き安定した得票を保ったものの、アメリカの主流派であるプロテスタントからの得票は2008年の47%から12年は41%と落としており、ロ

ムニーはオバマを15%上回った率で票を得ており、共和党の元来の姿を取り戻している。ロムニーのモルモン教徒としての背景が共和党員の投票動向にいかにか影響してくるかが懸念材料ではあったが、民主党も合わせて有権者全体の18%がモルモン教徒の大統領候補には投票しないと回答しており、これは低い数字と見るべきかもしれない、また43%がロムニーの宗教背景について正確な知識を持っていなかった²⁷⁾。ロムニーがモルモン教の奇異に思われる要素に関しては明確に否定し、また宗教問題が選挙中に浮上することを極力避けた戦術が功を奏し、宗教保守派から距離を置かれて票を落としていた08年のマケインよりもよほど共和党の基盤固めに成功していたといえる²⁸⁾。

既婚未婚別においては、やはり2008年に比べてやや落としているものの、既婚者は共和党、未婚者は民主党の図式が明白である²⁹⁾。特筆すべきは、未婚女性層においてオバマは2008年より得票率を伸ばしていることであり、これまで見てきたように民主党の従来からの基盤から着実に得票していたにせよほとんどの範疇で得票率を落としていた点を鑑みれば、この層が民主党への傾斜を強めている事実は目を引く。同様の文脈で、LGBTと呼ばれるセクシュアル・マイノリティの有権者からは81%の割合で得票していたことも、民主党の少数派、多様性の政党としての性格を改めて浮き彫りにする現象であったといえる³⁰⁾。

このように、人口統計下部集団別での投票傾向を見た場合、それぞれの党の基盤の特徴が、オバマの圧勝で薄らいだ観のあった2008年と比較して改めて顕在化し、前回と比べオバマはほぼ全ての領域で下降し、全体の投票率がやはり下降したことも重なり、両候補の拮抗状態、オバマの辛勝を説明していたといえよう³¹⁾。

2 短期的要因と長期的要因

2012年大統領選挙を接戦にしてきたその年に特化した背景に目を移すならば、まず短期的な世論状況を見る必要がある。

有権者が投票行動意思決定をする際に最も重視する問題が経済状況であることは不変であるが、オバマを苦戦させた要因はここにあるといえる。よりよい経済政策を打ち出すと思われる候補が勝利するのが通常であるといえるが、この項目においてオバマはロムニーに対して47%対51%で劣勢だったのである。また15%の有権者が最重要課題として重視していた

財政赤字問題においても、オバマ32%に対してロムニーが66%と差を開けられていた。大統領としては未知数であったが、会社経営者および州知事としてのロムニーの経済運営手腕は評価され期待されていたのである。

オバマは失業率が7%を上回っている状態で再選された現職大統領としては、1936年のフランクリン・ローズヴェルト (Franklin D. Roosevelt) に次いで二人目であり³²⁾、その水準であるならば落選の結果でもおかしくはない。2012年は有権者の70%以上がアメリカの経済状態は「良くない」または「悪い」と感じており、選挙の時点までその水準で推移し、その中の60%がロムニーに投票していた。しかし投票のあった11月の時点では、経済状況はマイナス評価ながらも、9月の-29から-14へと上昇局面にあり「好転している」と感じられていた³³⁾。この面において現職の再選に有利に導いた要素があるとすればこの点のみであろう。いずれにせよ、消極的な選択であったことは想像に難くない。オバマは一期目の任期中で経済を向上させたか否かへの問いでは否定的が優勢であって、対抗馬のロムニーの潜在的な手腕は評価されていたが、それでもロムニーのような裕福な人物が、有権者大半が感じていた経済における閉塞感を共有できるかと問われたら、これにも否定的であったのであり、それを消去法で二者択一しなければならなかったのである³⁴⁾。

大統領選挙をめぐる世論に関して2008年から変化した点は、保険制度改革への関心が上昇した点、逆に、イラク戦争、対テロリズム政策といった2000年代に突出していた対外政策に関連する個別の問題への関心が薄れた点であり、いずれも微力ながらオバマに有利に作用したといえよう³⁵⁾。

このような世論状況から短期的な意味での2012年選挙の結果を分析するならば、オバマ再選の本質とは、落選させるほどの理由が見当たらなかったから、という消極的なものとなろう。決して積極的なオバマへの支持が存在したゆえの結果ではなかった。現職大統領として知名度を得る引き換えとして、初回当選選挙では政府の変革を掲げた抵抗勢力として旋風を巻き起こせたところが、再選を目指す選挙では自らがその政府となってしまう、守勢に立たされた。グラフ1にあるように、2012年はオバマの業績評価率は選挙の直前まで50%を越えることはなく、その状態での再選自体過去にあまり例がなかったため、当選が危ぶまれるほどの接戦となった。そのような逆境にもかかわらず、信任投票としての選挙で落選するほど支

2012年大統領選挙の過程と投票行動の分析

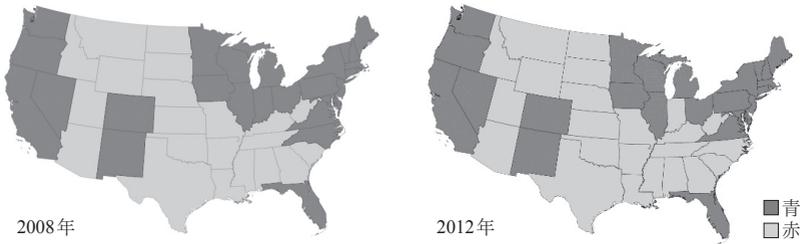


図1 州別結果

持は落ちておらず、民主党の支持基盤からの得票を着実に固めたため再選が実現したといえる。

その際、2008年に引き続いて、無党派が帰ってきたことも影響している。2000年代には、それまで一定方向で増え続けてきたといわれていた無党派層が、「赤」と「青」の分裂を背景に、選挙があるごとに党派性が復活したかのごとくの投票行動を見せていたが、2008年より再び自らを無党派だと認識する有権者の率が上昇し、政党にこだわらない投票を再び始め、その動向が結果全体に大きな意味を持つようになった。

より長期的な展望となるが、既に地域別での投票行動に関しては検討したが、州別の選挙結果をより具体的に見た場合、2008年と12年を比較した場合ほとんど変化が見られなかった。オバマは2008年で勝利していたノース・キャロライナ州とインディアナ州を2012年では落としており、2010年の人口調査に基づいた州別大統領選挙人数の増減を加味した上で、2008年の選挙人獲得数365から12年の332への下降が大まかに説明できる³⁶⁾。そして08年と変化があまり見られないということは、その時点での説明が有効であることを意味する。すなわち、2000年代以来の「赤い州」と「青い州」の区別は有効であり、オバマは「青い州」の全てを獲得し、「揺れる州」のいくつかをそれに加えることによって当選を可能にした構図がそのまま生きている。人口統計下部集団別投票行動において見られたような、08年と比較してそれぞれの党の伝統的基盤が復活している傾向にこの現象は支えられているといえる。これには長期的な側面と短期的な側面の双方を持つ。長期的には各々の党が強い州がある程度固定化されるが、今後の選挙を見ていく場合、それ以外のヴァージニア州、フロリダ州、オハイオ州、ペンシルヴァニア州、コロラド州といった「揺れる州」がその

時点でのどのような結果を見せるかによって選挙全体の結果が左右されることになるといえよう。従って、オバマが再選されたからといって民主党の優位が確立されたわけではなく、長期的には、選挙があった時点の特化した状況によっていずれの党の候補が勝利してもおかしくない状態の継続が再確認されたといえる³⁷⁾。

同時に行われた議員選挙、知事選挙に目を移すと、上院では改選議席が33あったなかで、民主党が勝利した州が23、共和党が10であり、非改選議席をあわせた選挙後の第113議会での配分は民主党55³⁸⁾対共和党45となった。改選前の民主党53対共和党47から民主党は議席数を伸ばす結果になり、「青い州」の多い東北部で改選が集中していたことがこの結果に繋がった。下院では共和党234、民主党201と改選前の共和党240対民主党190から差は縮められたものの共和党の多数派構造が継続することになった。1994年から始まった下院での共和党多数派構造は、2000年代の大統領選挙における共和党への優勢と引き継がれ、それがオバマの連続当選によって結果の上では消されているが、最も有権者に近い下院における優勢は、共和党の大統領候補が勝利する可能性はいつでもあることを示しているといえる。知事選挙では、改選があった州が11で民主党が7州、共和党が4州で勝利し、これはそれら改選州の選挙前の割合と同じであり、全体として民主党知事の州は20、共和党知事を抱く州は29、無党派知事が1州という選挙前の割合に変化はなかった。大統領選挙、上院議員選挙における勝利候補、下院議員選挙における州内多数が一致している度合いは27と高い³⁹⁾。

IV おわりに——位置付けと展望

2012年選挙は現職大統領が再選を目指す選挙としては最も僅差の結果であった。それは、有権者にとってアメリカの経済指標が上向いていると感じられない状況で行われ、現職の大統領オバマは2008年の登場時における改革者としての立場を失い守勢に立たされ、その国家運営は決して評価されてはいなかった。しかし、裕福な対立候補を選んだところで、中産階級以下が抱える苦境に共感してくれるか否かが未知であり、そのような消極的消去法による二者択一が行われたためと思われる。結局のところ現職としてのオバマの有利と、選挙直前のハリケーン・サンディへの対処で

評価を上げ、僅差で勝利することができた。ここに短期的な意味での一つの惰性が働いていたと見ることができる。

もう一つの惰性とは長期的に見たものであり、オバマが前回の勢いを落としたことによって2000年代以降の「赤いアメリカ」と「青いアメリカ」の分裂が、地理上においても人口統計下部集団においても復活し、共和党も伝統的な票獲得基盤を取り戻し、前回より差を縮めた。同時に08年以来、無党派層が再び無党派層らしくなり始め、また地理上では「揺れる州」が内部でより拮抗するようになり、それらがいずれに傾くかが大きな意味を持つようになった。そこにおいて、オバマは当選するに十分な支持を得ていたといえる。

2012年の結果を理論的枠組みに当てはめてみるならば、まず「政党再編成」論から見た場合、キー（Vladimir O. Key）やバーナム（Walter Dean Burnham）が言った意味での「決定的選挙」の条件は明らかに備えていない⁴⁰。しかしながら、長期的な趨勢を再確認する結果であったかもしれない。すなわち既述のとおり、地理的および人口統計下部集団別の投票行動のパターンが固定化し、「揺れる州」や無党派の動向に最終的なキャスティングヴォートが握られる構図が定着し、これがいずれかの政党が一定期間優勢を保って政治史の一時代を形成するといった意味での「政党再編成」ではない⁴¹が、二つの政党が僅差で拮抗する状況が続き、いずれの政党も勝利しうる状態で特徴付けられる一時代が形成され⁴²、2012年はそれを再確認する結果となった選挙であるかもしれない。リー（Nicol C. Rae）はこれを「ポスト冷戦選挙秩序（Post-Cold War Electoral Order）」と名付け、クリントンが登場した1990年代前半に形成された体制であるとしている⁴³。いま一つの惰性とは、2012年はこの潮流の上に存在した選挙であったという点にある。これが12年選挙と1990年代以降のアメリカ政治の全体像の最も妥当な説明であるかも知れず、それはアメリカ政治の一つの到達点であるかもしれない。

この状態はしばらく続いていかざるを得ないようである。オバマは選挙の後、2012年暮れに「財政の壁」危機を、13年10月には国民保険改革法案をめぐる議会との対決による債務不履行危機を経験し、自らの大統領制のレイムダック化に否応なく直面している⁴⁴。2014年中間選挙では共和党が勢いを取り戻すことが予測されている⁴⁵。早くも2016年には、民主党は08年にオバマに長引いた党指名候補争いに敗れたヒラリー・クリン

トン (Hillary Rodham Clinton) の再出馬、共和党は、既述のクリスティ知事、ブッシュ大統領の弟で元フロリダ州知事のジェブ・ブッシュ (Jeb Bush) らの出馬の可能性が取りざたされている。ヒラリーの場合は年齢が、クリスティの場合は健康状態が、ブッシュの場合は一家による大統領職の独占状態が好ましいことか否か、が問題視されよう。そしてマスメディアの多様化の時代における選挙は、既に見たような候補者への支持の乱高下と同様に、オバマ自身が08年に証明したように、無名候補の突然の登場を可能にしているのである。

注

- 1) James W. Ceaser, Andrew E. Busch & John J. Pitney, Jr, *After Hope and Change: The 2012 Elections and American Politics* (Lanham, Md.: Rowman & Littlefield, 2013), p. 157.
- 2) Morris P. Fiorina, *Retrospective Voting in American National Elections* (New Haven, Conn.: Yale University Press, 1981).
- 3) Pietro S. Nivola & David W. Brady (eds.), *Red and Blue Nation?: Characteristics and Causes of America's Polarized Politics* (Baltimore, Md.: Brookings Institution Press, 2006).
- 4) Byron E. Shafer, *The End of Realignment: Interpreting American Electoral Eras* (Madison, Wis.: University of Wisconsin Press, 1991); David R. Mayhew, *Realignment: A Critique of an American Genre* (New Haven, Conn.: Yale University Press, 2004).
- 5) 阿南東也「2010年中間選挙の過程と投票行動の分析—「茶会の逆襲」の本質と平常への回帰」『愛知県立大学外国語学部紀要(地域研究・国際学編)』第44号、2012年、1-24ページ。
- 6) Charles S. Bullock, III (ed.), *Key States, High Stakes: Sarah Palin, The Tea Party and the 2010 Elections* (Lanham, Md.: Rowman & Littlefield, 2012).
- 7) Elizabeth Drew, *Showdown: The Struggle between the Gingrich Congress and the Clinton White House* (N.Y.: Touchstone, 1997); Steven M. Gillon, *The Pact: Bill Clinton, Newt Gingrich, and the Rivalry that Defined the Generation* (N.Y.: Oxford University Press, 2008).
- 8) 阿南東也「1996年中間選挙の過程と結果の分析—90年代政治潮流への一試論」『愛知県立大学外国語学部紀要(地域研究・国際学編)』第30号、1998年。
- 9) 阿南東也「1998年中間選挙と大統領弾劾をめぐる政治過程—新世紀を迎

- える政治潮流」『愛知県立大学外国語学部紀要（地域研究・国際学編）』第32号、2000年。
- 10) Lydia Saad, “Gingrich Running Strong With Traditionally Reliable Voters,” *Gallup Online*, December 15 (2011) [<http://www.gallup.com/poll/151547/Gingrich-Running-Strong-Traditionally-Reliable-Voters.aspx>]
 - 11) Lydia Saad, “Santorum Soaring in the Midwest and With Weekly Churchgoers,” *Gallup Online*, February 22 (2012) [<http://www.gallup.com/poll/152900/Santorum-Soaring-Midwest-Weekly-Churchgoers.aspx>]
 - 12) Michael Tomasky, “A Mouse in the White House?” *Newsweek*, August 6 (2012), pp. 22–27.
 - 13) Lydia Saad, “Romney Less Polarizing Than Gingrich or Obama,” *Gallup Online*, December 22 (2011) [<http://www.gallup.com/poll/151736/Romney-Less-Polarizing-Gingrich-Obama.aspx>]
 - 14) 阿南東也「2008年大統領選挙の過程と投票行動の分析—「史上初の黒人大統領」候補の存在の實と虚」『愛知県立大学外国語学部紀要（地域研究・国際学編）』第42号、2010年、11–12ページ。
 - 15) Jeffery M. Jones, “Romney, Santorum Tie as Gingrich Voters’ Second Choice,” *Gallup Online*, March 16 (2012) [<http://www.gallup.com/poll/153308/Romney-Santorum-Tie-Gingrich-Voters-Second-Choice.aspx>]
 - 16) Barry C. Burden, “The Nominations: Ideology, Timing, and Organization,” in Michael Nelson (ed.), *The Elections of 2012* (Washington D.C.: CQ Press, 2013), chap. 2; Barbara Norrander, “Fighting Off Challengers: The 2012 Nomination of Mitt Romney,” in Janet M. Box-Steffensmeier & Steven E. Shier (eds.), *The American Elections of 2012* (N.Y.: Routledge, 2013), chap. 3; Chuck McCutcheon, *The Elections of 2012: Outcomes and Analysis* (Washington D.C.: CQ Press, 2013), pp. 9–24; Ceaser, Busch, & Pitney, *op. cit.*, chap. 3.
 - 17) Lydia Saad, “Reaction to Ryan as V.P. Pick Among Least Positive Historically,” *Gallup Online*, August 12 (2012) [<http://www.gallup.com/poll/156545/Reaction-Ryan-Pick-Among-Least-Positive-Historically.aspx>]
 - 18) Lydia Saad, Jeffrey M. Jones, & Frank Newport, “Mitt Romney Brings Strengths and Weaknesses to GOP Stage,” *ibid.*, August 30 (2012) [<http://www.gallup.com/poll/156980/mitt-romney-brings-strengths-weaknesses-gop-stage.aspx>]
 - 19) オバマとバイデンのチケットバランスングについては、阿南、前掲論文（2010年）、11ページ。
 - 20) Rhodes Cook, “Un-Conventional Wisdom: The 2012 Conventions and the Nominating Process,” in Larry J. Sabato (ed.), *Barack Obama and the New America: The 2012 Election and the Changing Face of Politics* (Lanham, Md.: Rowman &

- Littlefield, 2013), chap. 4.
- 21) Jeffrey M. Jones, “Romney Narrows Vote Gap After Historic Debate Win,” *Gallup Online*, October 8 (2012) [<http://www.gallup.com/poll/157907/romney-narrows-vote-gap-historic-debate-win.aspx>]
 - 22) Jeffrey M. Jones, “Obama Judged Winner of Second Debate,” *Gallup Online*, October 19 (2012) [<http://www.gallup.com/poll/158237/obama-judged-winner-second-debate.aspx>]
 - 23) Jeffrey M. Jones, “Gender Gap in 2012 Vote Is Largest in Gallup’s History,” *Gallup Online*, November 9 (2012) [<http://www.gallup.com/poll/158588/gender-gap-2012-vote-largest-gallup-history.aspx>]; Frank Newport, “Gender Gap in Election Fueled More by Men Than Women,” *ibid.*, October 23 (2012) [<http://www.gallup.com/poll/158354/gender-gap-election-fueled-men-women.aspx>]
 - 24) John F. Harris & James Hohmann, “Obama’s Coalition: How the President Customized his Campaign and Cobbled Together his Majority,” in Box-Steffensmeier & Shier (eds.), *op. cit.*, chap. 1.
 - 25) 2012年の地域差の広がり、2008年よりは拡大したが、2004年を最高点として、2000年よりやや低い水準である。Avi Feller, Andrew Gelman & Boris Shor, “Red State/Blue State Divisions in the 2012 Presidential Election,” *Forum*, Vol. 10, No. 4 (2012) pp. 127–131.
 - 26) Sean M. Theriault & Megan M. Moeller, “The Effect of the 2012 Elections on Party Polarization,” in Box-Steffensmeier & Shier (eds.), *op. cit.*, chap. 6; Alan Abramowitz, “Voting in a Time of Polarization: Why Obama Won and What It Means,” in Sabato (ed.), *op. cit.*, chap. 2.
 - 27) Frank Newport, “Nearly One in Five Americans Would Not Vote for a Mormon Presidential Candidate,” *Gallup Online*, June 21 (2012) [<http://www.gallup.com/video/155270/Nearly-One-Five-Americans-Not-Vote-Mormon-Candidate.aspx>]
 - 28) James L. Guth & Leigh A. Bradberry, “Religion in the 2012 Election,” in Box-Steffensmeier & Shier (eds.), *op. cit.*, chap. 9.
 - 29) Andrew Dugan, “Married Voters Strongly Back Romney,” *Gallup Online*, September 14 (2012) [<http://www.gallup.com/poll/157469/married-voters-strongly-back-romney.aspx>]
 - 30) Gary J. Gates & Frank Newport, “LGBT Americans Skew Democratic, Largely Support Obama,” *ibid.*, October 18 (2012) [<http://www.gallup.com/poll/158102/lgbt-americans-skew-democratic-largely-support-obama.aspx>]
 - 31) Nicole Mellow, “Voting Behavior: How the Democrats Rejuvenated their Coalition,” in Nelson (ed.), *op. cit.*, chap. 4; Larry J. Sabato, “The Obama Encore That Broke Some Rules,” in Sabato (ed.), *op. cit.*, chap. 1.

- 32) *Ibid.*, p. 1.
- 33) Lymari Morales, “U.S. Economic Confidence Steady Amid Fiscal Uncertainty,” *Gallup Online*, December 18 (2012) [<http://www.gallup.com/poll/159323/economic-confidence-steady-amid-fiscal-uncertainty.aspx>]
- 34) Gary C. Jacobson, “How the Economy and Partisanship Shaped the 2012 Presidential and Congressional Elections,” *Political Science Quarterly*, Vol. 128, No. 1 (Winter 2013), pp. 4–14.
- 35) Christopher Wlezien, “Public Opinion and the Presidential Election,” in Box-Steffensmeier & Shier (eds.), *op. cit.*, chap. 8.
- 36) 「青い州」が多い東北部と中西部では前世紀以来の人口流出が続いており大統領選挙人割り当てが減少している。ノース・キャロライナ州は15に増えた。他に2008年では連邦下院議員選挙区毎に大統領選挙人を分割する方式を採用しているネブラスカ州で二つの選挙区をオバマ、一つをマケインが獲得し、州全体ではマケインが上回っていたためオバマ2票対マケイン3票と分裂していたが、12年は分裂が解消し5票すべてロムニーが獲得した。
- 37) Benjamin Highton, “Sorting the American States into Red and Blue: Culture, Economics, and the 2012 US Presidential Election in Historical Context,” *Forum*, Vol. 10, No. 4 (2012), pp. 11–19.
- 38) 2012年の当選数も共に、無所属だが民主党議員集会に出席しているキング (Angus King, メイン州選出) とサンダース (Bernie Sanders, ヴァーモント州選出) を含んでいる。
- 39) Gary C. Jacobson, “Congress: Partisanship and Polarization,” in Nelson (ed.), *op. cit.*, chap. 7; Roger H. Davidson, “Congressional Elections 2012,” in Box-Steffensmeier & Shier (eds.), *op. cit.*, chap. 8; Geoffrey Skelley, “Candidates Matter: 2012’s Senate and Gubernatorial Elections,” in Sabato (ed.), *op. cit.*, chap. 8; Kyle Kondik, “Republicans Hold the Line: 2012 National House Contest,” *ibid.*, chap. 9.
- 40) Walter Dean Burnham, *Critical Elections and the Mainsprings of American Politics* (N.Y.: W.W. Norton, 1971).
- 41) Sean Trende, “Are We in an Electoral Realignment?” in Sabato (ed.), *op. cit.*, chap. 12.
- 42) 二大政党の地理上での傾向は固まりつつあるが、一党が長期的に優位となる形での「政党再編成」は起こりにくいとの分析は2008年に既にあった。Demetrios James Caraley, “Three Trends over Eight Presidential Elections, 1980–2008: Toward the Emergence of a Democratic Majority Realignment?” *Political Science Quarterly*, Vol. 124, No. 3 (Fall 2009), pp. 423–42.
- 43) Nicol C. Rae, “The Reaffirmation of the Post-Cold War Electoral Order: The Meaning of the 2012 Election,” in Box-Steffensmeier & Shier (eds.), *op. cit.*,

- chap. 10. 同様に以下も参照。David R. Mayhew, “The Meaning of the 2012 Election,” in Nelson (ed.), *op. cit.*, chap. 9; Sean Trende, “Are We in an Electoral Realignment?” in Sabato (ed.), *op. cit.*, chap. 12. 少数民族の人口増加は民主党にとって有利に作用するであろうが、南部への人口流動による共和党の構造的優位によって相殺されるかもしれない。以下も参照。Jamelle Bouie, “Forward: The Future of the Democratic Party,” *ibid.*, chap. 10; Robert Costa, “A Time for Choosing: The Future of the Republican Party,” *ibid.*, chap. 11.
- 44) Bruce Nesmith & Paul J. Quirk, “The Presidency: No Exit from Deadlock,” in Nelson (ed.), *op. cit.*, chap. 8.
- 45) Michael Nelson, “2013 and Beyond: Barack Obama and the Perils of Second-term Presidents,” in Nelson (ed.), *ibid.*, chap. 1.

The Analysis of the Process and the Voting Behavior of the 2012 Presidential Election:

A Process of a Passive Elimination, and Two Inertias

Haruya ANAMI

The reelection of Barack Obama in 2012 was accompanied by anomalies: since the outcome of the general election was so close, Obama became the first reelected president to have fewer votes in one's second election than those one had had in the previous election; he became the first president since FDR to be reelected with the unemployment rating above 7.5%; he became one of the few presidents to be re-elected with the job approval ratings below 50%, among others.

The Republican Party had a close and fierce contest for the nomination for candidacy among former Governor Mitt Romney, former Senator Rick Santorum, and former House Speaker Newt Gingrich, which signaled the intra-party divisions: moderates supporting Romney, social and cultural conservatives supporting Santorum, and fiscal conservatives supporting Gingrich. Romney secured the nomination with his abundant campaign resources and with his name recognition. The contest between Obama and Romney was another tight one as Obama lost his credential as a reformer which he had in 2008, and Romney was considered that he would handle economy better than Obama had done.

The result of the general election was one of the closest in recent years in which close elections between the two parties have been the common feature: Obama won by securing 51% of the national votes and 332 Electoral votes, whereas Romney secured 49% of the popular votes and 206 Electoral votes. The votes for Obama declined as compared to 53% of the popular votes and 365 Electoral votes he acquired in the 2008 election.

Both parties reenergized respective traditional demographic bases as Obama lost his overarching momentum he had in 2008: Obama gained more votes from female, unmarried, non-white ethnic, Catholic voters, voters below the age of 30, with lower incomes, from “blue states” in New England, Mideast and Pacific regions; Romney received votes from male, married, white ethnic, Protestant voters, voters above the age of 50, with upper

incomes, from “red states” in South, Plains, Mountain regions. The results of an election have become dependent on tendencies in independents and “swing states” as independent voters have grown in number and have turned more neutral, and “swing states” have become more unpredictable.

The outcome of the election can be explained in “a passive process of elimination and “two inertias”. The electorate did not necessarily give a positive reaffirmation to the first 4 years of the Obama presidency; on the other hand, the voters did not fully trust a rich candidate as Romney because he might not be in touch with the ordinary people’s feelings. The voters were forced to choose either of the two to whom they did not entirely support. One inertia is that in a shorter term, the other in a longer term: (1) in spite of the lack of full support from the electorate, Obama was reelected because of his name recognition as the incumbent president and because he did not have enough reasons to be rejected; (2) in the face of the fact that the divisions along the demographic substrata and along the lines of “red” America and “blue” America have become more visible, Obama was able to secure number of votes enough to be reelected by consolidating traditionally Democratic bases and maintaining enough support from independent electorate and swing states.

The electoral situation in which voters have been divided along the “red” and “blue” lines, and the outcome of the each election being all the more dependent on the tendency within independent voters and swing states, a situation a political scientist termed as “the Post-Cold War Electoral Order,” may not be a form of partisan realignment but obviously a long-term trend, thereby making predictions of future elections even more difficult.